

第二十一回がん哲学塾

ニュースレター

発行日：令和元年 10 月 11 日

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

E-mail: juku_0307@yahoo. co. jp

9 月 28 日(土)

チャイルド・ケモ・クリニックの院長である楠木 重範先生を
お招きしてメディカルカフェを開催しました。

二回目のメディカルカフェを終えて

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ
1回生 西尾 萌

今日はチャイルドケモハウスの理事長さんのお話を伺いました。私は夏に、チャイルドケモハウスのボランティアの見学で一度伺いました。お話の後の一華ちゃんの VTR では、実際にチャイルドケモハウスが利用されている様子を見ることが出来ました。「片方を開けると病院、もう一方は家」というように、小児科の先生の診断を受ける姿と、自宅のような病室で家族団らんのシーンを見ました。妹と元気に走り回っていた一華ちゃんが、だんだんと体をがんに蝕まれてゆく姿には胸を痛めました。小児がんは家系や育て方に関係なく生じる病気です。テレビなどのマスメディアで報道されることがあるものの、理解されにくいのが現状だと伺いました。一華ちゃんの生活をカメラに収めることを決めたのには、「一華ちゃんを可哀想だと思ってほしくない」という事も理由にあるそうです。痛くて辛い闘病生活を送った彼女の人生を、私たちはよく頑張ったね、素晴らしいね、と肯定すべきなのでしょう。「可哀想に」という言葉には「私はそうでなくて良かった」という冷たいニュアンスが含まれているような気がします。考えたり、感じることは人それぞれ自由ですが、それを他人に共有することは別です。相手がどう感じるか、一度考えてから発言することの重要性を今回のお話を伺って感じました。

メディカルカフェで患者様とお話をする時間では、嬉しいお言葉を聞きました。忙しい担当の医者によく相談することが出来ず、さらに一人暮らしで悩みを打ち明けられなくて心を閉ざしていたけれど、このメディカルカフェを知ってから思う存分話す機会が出来て嬉しいとの事でした。医者と患者の意見の食い違いや人間関係の話など、幅広い話題で意見を交換しあう場所を求めてメディカルカフェに参加された方が、笑顔でお帰りになったのが嬉しかったです。今回の樋野先生の一文のテーマであった、寄り添うことの大切さを実感した一日でした。がんの専門的な話になると、私は意見を出したり励ましたりすることは出来ないけれど、患者様のお話を寄り添う形で聞くことで少しでも心の支えになれば良いな、と思いました。二回目のメディカルカフェの参加で、前回よりも色々な方とお話することが出来たのが嬉しかったです。

メディカルカフェを終えて
神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ
3 回生 新田 菜月

午前中のがん哲学塾は「寄り添う心は言葉を超える」がテーマでした。

言葉を交わす会話ではなく心を交わす対話を大切にしましょうとあり、それに沿って皆さんそれぞれが自分の経験を交えながら話し合いました。一人一人のエピソードは当然ですがまったく違いました。外国に行ったときに言葉は通じないが身振り手振りで伝わったこと、落ち込んだときに飼っている犬が側にいてくれたことなど色々な経験談を聞いて良かったなと思います。

午後のメディカルカフェでは前回もいらっしゃった方が来てくださり「お久しぶりです。またいらしてくれましたね」と私が声をかけると「その後おばあ様の具合はいかがですか」と言われました。2ヶ月も前の、しかもたった1時間ほどしか話していないのに覚えててくださったことに私は感動しました。

講演はチャイルドケモハウスの院長さんのお話でした。私のいとこが小児がんにかかっていたので今回の講演はとても興味深いものでした。しかし、世間的には小児がんという病気はまだまだ知られていないらしく驚きました。

講演の最後に小児がんと闘う子どもとその家族のドキュメント映像を見ましたが、その場にいたほとんどの人が涙を流しながら見ていました。私のいとこは現在完治しており、また私自身がまだ小さくて記憶が曖昧なこともあって小児がんの治療の壮絶さを知りませんでした。

講演が終わり来てくださった方とお話をするときもいとこが小児がんにかかっていたということを話したら皆さんとても真剣に聞いてくださいました。

薬を飲まないほうが元気でいられるとおっしゃっていた方がいてそれは薬剤師を目指している者としては複雑な思いで聞いていました。ただ、私の祖母も薬をやめたほうがかえって食欲が増したと言っていたので薬を飲んでほしい薬剤師側、飲まない患者側どちらの意見にも共感できてしまいました。これをどうやって解決していくのかというのが薬剤師としての今後の課題かもしれないと思いました。

メディカルカフェに参加しなければ会うことのなかった方達や出来なかった経験などがたくさんあると思います。その出会いや経験を大切にしながら次回も参加したいです。

がんメディカル・カフェに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター
4 回生 恵美 良太

私は今回、3 回目のカフェへの参加となりました。今回、私がこのカフェを通じて学んだことは「今を生きるありがたさ」です。私の班には、約7年前に重度の胃潰瘍で手術をした80代後半の男性がいらっしゃいました。その男性はがんとは無縁だとおっしゃっていたのですが、なぜこのカフェへ参加したのかという問いに、「今生きてるありがたさ、楽しさというものを病気を通じてわかるようになったのでそれをがんの患者さんに伝えたい」というようなことをおっしゃってました。

次ページへつづく

私はその言葉を聞いてはっとしました。私自身も高校生で悪性リンパ腫になり、それまでは何気なく生きていた人生でしたが、「生きる」ということに関しての価値観がそれを経験してがらっと変わりました。ひどい熱に苦しめられ何もできなかったこと、体調が回復した後も免疫力の低下のせいで食べたいものが食べれなかったことなどやりたいことが出来ないということは非常に辛いことでした。なので、治療が終わってからは自分が今やれること、やるべきことは後回しにせず、今やろうということ意識してきましたが、それももう7年前のことで徐々に忘れかけていました。

余命宣告をされたがん患者さんは全国にもたくさんいると思います。中には、進行が早くて気付いた時には動けるような状態ではないという方もいらっしゃると思いますが、宣告された時はまだ体調がそこまで悪くない方も大勢いると思います。そこで、余命宣告をされたから落ち込んで何もしたくなくなるといったこともわからなくもないですが、残された時間をどう過ごすかは本人次第です。私は、事故や災害で急に死ぬより、余命を宣告され、その後やりたいことをやりきって死ぬことはありがたいことだと思います。なので今を生きることのありがたさに早く気づいて、やりたいことを今やるといったことを患者さんに伝えていけたらいいと思うと同時に、そういった患者さんをサポートできるような人になればいいなと思いました。

子供と向き合うとは

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

4回生 園部 愛梨

今回はチャイルドケモハウスの創設者である楠木先生のお話を聞きました。お話の中で子供は太陽の光と広いスペースがあれば意味もなく走り回る、しかし病気を患った子供は、病院の閉ざされた環境の中で生活しなければならないため開かれた空間を作りたかったと仰っていました。本来子供がはしゃぎ回りたい時期にじっとしていなければならない場合薬学生である私たちには何ができるんだろうかと模索しながら講演を聞いてました。この講演を聞いた後に結局「薬学生」としての解決策は見つからなかったけれども学習支援等のボランティア活動には私でもできると思いました。また一華ちゃんビデオを見たときにお母さんが「がんばれ」とは言わずに「もういっぱい頑張ってるもん」と声をかけていた場面が印象的でした。まだ小さい子供がこんなにも一生懸命抗がん剤治療に耐えながら頑張っている状況でご両親のかたの言葉の重みを感じました。今は、小児に対するお薬がほとんどなく成人量を減らすことで投与可能ということが多くあります。もっと小児に対するお薬の開発も必要だと感じました。薬剤師だけではなく、製薬会社でのMRとしての仕事、CROとしての治験の仕事等からも小児に対してもっとアプローチできるのではないかと思います。思い私の将来やりたいことの幅が広がった気がします。

また、がん哲学塾では「余計なことは受け取り過ぎない」という言葉が印象に残りました。どことなく相手の不機嫌な姿をみると私のせいなのかなと不必要に心配になる私にとてまさにこの言葉が「言葉の処方箋」となりました。相手のイライラまで考えているといつのまにか自分までもがイライラしたり深く考え込んでしまったり負のスパイラルに陥ってしまうことがたびたびあります。だけど、そんな時は「気にすんな」と自分自身に言ってあげたいです。

メディカルカフェに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

5 回生 久野 聡子

「寄り添う心は言葉を越える」

この樋野先生のお言葉を読ませていただいた際に、私は住む場所が遠くなかなか会いに行くことができない祖母のことを思い出しました。会うたびに少し緊張して人見知りしてしまい、あまり自分から話すことなくひたすら祖母の話を聴くだけなのですが、そばにいることならできると思い、祖母がいるリビングという空間に常にいて過ごすようにしていました。最終日に、また来てねと言ってもらえたことが何よりも嬉しかったのを覚えています。アクティブラボの方達のお話も聴いて、例えば外国人と日本人、人と動物、のように生活環境や言語が異なる存在でも、お互いに“寄り添いたい”“助けたい”といった愛のある心を持って接することで心は通わせることができるのだと思いました。言葉も時には自分の気持ちを伝える際に大切ですが、無理に言葉を発して自分が支えようと焦る必要は全く無く、同じ空間にいてそっと寄り添うだけで良いのだと改めて気付かされました。今回学んだことを忘れずに、カフェに限らず色々な場面で活かしていけたらいいなと思います。

午後は、楠木先生にご講演いただきました。「こどもは太陽の光と広いスペースがあれば意味もなく走り回る」この言葉を聞き、思わず自分の幼少期の姿と重ね合わせ、納得しました。一般的に医療者はベッドで子供の笑顔を見ただけで回復してきている、元気になっている、と判断しますが、親は本来の健康な子供の姿とは思っておらず、その気持ちのズレを解消し、子供の本来の姿を取り戻すまで元気になることができるように配慮した施設作りに感動しました。

家族みんなで食卓を囲む幸せ、幼稚園に行くことができる幸せ、一般の病棟では隔離されてしまひななかなか会う事ができない兄弟と当たり前のように遊んで動きまわる事ができる幸せ、いろんな幸せをチャイルドケモハウスでは叶える事ができる。このような病院と家の中間的な施設をこれからますます普及させていかなければならないと思ったと同時に、ボランティアという形で微力ながらもお手伝いさせていただきたいと強く思いました。

カフェではある方が、相談したくてもなかなか相談しにくい環境がとても生きづらいとおっしゃっていました。親友だと思っていた人に自分の病気のことを伝えた時に、こちらからは何も言っていないのにあなたのお世話はできない、などと言われてしまい、深く傷つき、以来人に相談することが怖く自分でしっかりしないといけないという思いが強くなったそうです。このお話をお聞きした際に、人の思いに対してどう思うかは人それぞれ自由ですが、思ったことを全て口に出して言う必要はなく、目の前の相手の気持ちをよく考えてから言葉を発する必要があると感じました。また、このような方が自分の不安な思いを否定されずに受けとめてもらえる、安心感のある空間作りが必要であると思いました。

メディカルカフェを終えて

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ

3回生 徳田 華歩

私の班では前回参加したときとは違ってがん患者さんがいませんでした。医療従事者の方とがん患者さんに寄り添う方、とそれぞれ違った視点でお話を聞いたのはとても考えさせられる時間でした。特に印象に残ったのはメディカルカフェ終了後にえり先輩も仰っていた「手紙」についてです。今の時代、情報の収集や発信、コミュニケーションの手段として多くの人が利用しているインターネットは生活をしていく中でかかせない存在へと急速に進歩してきました。電車の中を見ていると皆片手に持っているのはスマートフォン。いまの子どもたちは小学生なのにも関わらずスマートフォンを持つ時代になっていてその子どもたちの“当たり前”と私が思う“当たり前”とは格段にかけ離れているように感じます。そんなネット社会の中で私は原始的ともいえる「手紙」というツールを大切にしています。そう思うきっかけとなったのは「ヴァイオレット・エヴァーガーデン」という京都アニメーションさんの作品を観てからでした。この話は道具として生きてきた少女が自動手記人形として手紙を通じて依頼者の様々な感情に触れ、人間としての心を理解し、「愛してる」の意味を知っていく物語です。便箋や封筒を用意しなければならないし、手書きで書くのも手間がかかって全体的に手紙を書くことは面倒だと思っていました。しかしこの作品を通じて亡くなった愛犬や亡き祖母に手紙を書くきっかけにもなり、手紙を書くことの大切さや人の心を理解し、寄り添い支え合うことの難しさに共感しました。今回同じ班だった方はがん患者さんに手紙を送っているんだというお話を聞きました。長々と書くわけではなく「負けないで」と短い言葉で想いを綴っているそうです。その話を聞いたときとても心打たれました。そのがん患者さんは病室に籠もりっきりで外に出ようとしめない方らしく、手紙を送った方は今も大丈夫かなと心配している様子でした。しかし私は人の想いに届かない手紙などないと思っています。手書きで感じる温もりと自分の心に訴えかけているような強いメッセージ性、文章から感じるその人の個性さ。手紙は人の心にダイレクトに響くツールだと思っているのできっとそのがん患者さんの支えになっています。今は気持ちを整理するのに時間がかかるかもしれないけれどひとつひとつの優しく温かい積み重ねがきっとがん患者さんの気持ちにひを灯すと願ってその方のお話を聞いていました。メディカルカフェではお菓子と一緒に一言綴ったメッセージカードを添えています。持って帰る方も多く、ちょっとした些細なことでも温かい気持ちになっているのかなと思うとすごく嬉しいです。

人によって寄り添い方は様々です。相手の立場に立ち、相手の視点から物事を見る。言葉を交わすのではなく心を交わす会話を意識し、ただ隣にさりげなく寄り添うというのもひとつの寄り添い方ですが手紙というツールを通じて人々の心に寄り添うというのも一種の支えになるのではないかと改めて気付かされ、私もある人に手紙を書いてみようと思わせてくれた今回のメディカルカフェは自分にとってとても有意義で充実した貴重なひとときとなりました。

2回目のメディカルカフェを終えて

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ

3回生 北 夏美

2回目のメディカルカフェを終えて、悩んでいる人、困っている人に寄り添うことの大切さを学びました。そのような人たちに対して無理に自分の言葉や考えを伝えなくても、横にいて話を聞きながら聞いたりするだけで相手が安心できたり、心を落ち着かせることができたりするのだなと思いました。

2回目のメディカルカフェは1回目のメディカルカフェみたいには緊張もあまりしませんでした。1回目は何を喋ったらいいかなとか、何か質問されたらどうしようとか思って、事前に少し話す内容とかを決めていたけど、そのようなことは実際に必要はなくて、その場で自分が思ったことを伝えることや相手の話を聞くことの大切さを知れたので2回目は気が楽でした。そして、今回の班はがん患者さんが居ませんでした。医療ソーシャルワーカーの方や旦那さんががん患者さんの方だったから気持ちも楽だったのかなと思ってしまいました。旦那さんががん患者さんの方も再発をせず今年で5年を迎えると嬉しそうに話をしていたからというのもあるからだと思います。でもどうして気が楽なのだろうって思うと、やはり自分がなったことのない病気は共感することもできないし、他人事みたいになってしまっているのかなと思い少し自分自身が情けなくなりました。けど家族にがんと闘っている祖父がいるので家族が思っていることなどは共感できることが多かったです。それで少し思ったことがあります。がん患者さんが家族の中にいる方同士やがん患者さん同士での会話は盛り上がっていました。その一方でそうではないがん患者さんと家族の方との会話は先程よりもあまり盛り上がることはなく、立場が違うとなるとここまで違うのだということも実感しました。確かにがん患者さん同士で話しているのを見ていると病気のこと以外のたわいのない話でも盛り上がっていました。それを考えるとやはり立場が同じなだけに話しやすさもあるのかなと思いました。そして心が通じ合うということもこういうことかなと思いました。これらを通してまだまだ未熟で何もわからない私に話をするだけで、聞いてもらえるだけで心がスッと軽くなると1回目の時に言われたことを思い出し、改めて嬉しくなりました。そしてメディカルカフェはがん患者さんが集まる会と思っていたけれど、2回目を終えて私の中でのメディカルカフェは、月に1度の特別な時間が訪れるカフェだと思うようになりました。それも待ち遠しく思っている方のお陰でそのように少し砕いて考えられるようになりました。また私も1ヶ月後のメディカルカフェが待ち遠しいです。

気づかされたこと

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ

1回生 濱部 あみ

これまで私は、友人から相談されたら自分なりの答えを出して解決の手助けをしようという気持ちしか持っていませんでした。しかし、自分でも納得のいかない答えしか伝えらず本当に友人のためになっているのか分からない時がありました。でも、がん哲学塾で「寄り添う心には言葉を超える喜びを互いにもたらず力がきつとある。」という文章を読んだ時、無理に言葉で伝えなくてもいいんだと思い、気持ちが楽になりました。

次ページへつづく

これからは伝えなければならないことは言葉として伝えるが、言葉では伝えられない気持ちは寄り添うことにより心で伝えたいと思います。また、「どんな言葉をかけてもすっきりしない、納得の出来ない人だっています。相手の気持ちが受け入れる状態になれば言葉は深く届きません。」という文章にも共感しました。私が友人に相談をした時、どんな言葉をかけてもらっても気持ちが晴れなかったことがありました。その時、「どうして分かってくれないんだろう。」や、「悩み事の話はやめて違う話をしよう。楽しい話をして元気になろう。」とっていました。しかしそれは間違いで、自分が悩み事で精一杯になっていて、相手の気持ちを受け入れる状態になっていなかったことに気がつかされました。せっかく相談にのってくれていた友人に申し訳ない気持ちになりました。しかし、今回気がつくことができたので自分の気持ちの準備が整ってから相談するようにしようと思いました。さらに、自分が相談にのる側に立った時、相手の反応が思っていたものと違って、「まだ心の準備ができていなかったただから準備ができるまで待とう、寄り添うことに専念しよう。」と思える気がしました。そのことに気がつけば、相談する側、相談にのる側、共に嫌な思いをすることもなくより良い解決策が思いつくと思いました。

今回のメディカルカフェが二回目の参加でしたが、前回の三分の一ほどの人数しかおらず会話がすぐに終わってしまうのではないかと心配していました。しかし、「二ヶ月に一度の楽しみなんです。今日も参加できてよかったです。」と最初に私に仰ってくださった方がいて、話が続く続かないの問題ではなく、来てくれた人が「参加して良かった。また来よう。気持ちが楽になった。」と思える環境を作ることが自分の役目だと気づかされました。

メディカルカフェ終了後、今日の感想を伝え合う時間に「薬を飲まない方が元気になった。処方箋をもらっても薬局に行かないまま帰る。と言ってる方がいました。」ということを知りとても衝撃を受けました。薬剤師は来なかった患者さんを知らないままになるし、患者さんの判断で薬を飲まないことになるため危険だと思ったからです。確かに、薬には副作用があるため飲まない方が元気になることもあるとは思いました。しかし、どうしても飲まないといけない薬が出ている場合もあると思うので、薬局に来てもらうことは重要だと思います。私が考えた対策としては、医師に薬局に行くことや、薬を飲むことの重要性を診察時に伝えてもらうことです。薬剤師は薬局で患者さんを待つことしかできないので、医師に協力してもらう必要があると思います。患者さんにも選ぶ権利はあるので薬を飲むか、飲まないかは自分の責任で選んでもらう必要があると思います。なので、医師に「自分は薬を飲みたくない。」と伝えてもらい、どうしても飲まないといけない薬だけ処方箋を出してもらい薬局に取りに行くシステムに変えることが必要だと思います。医師の中には添付文書を読まない人もいると聞いたことがありますが、その状況のままであれば患者さんに十分な説明ができず、患者さんも正しい判断ができないと思うので医師にも薬について深く学んでもらう必要があると思います。将来、薬剤師になった時に患者さんの気持ちを優先することも大切ですが、そこを優先しすぎて助けられなかった患者さんを助けられなかったら困るので、正しい判断をできる学力をつけておきたいと思いました。

メディカルカフェに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

5 回生 増田 悠香

私の病院実習先が小児専門の病院であったことと、メディカルカフェが開催される前の週にチャイルドケモハウスを訪問させていただき、ボランティアをするにあたっての説明をうけていたこともあって、今回の講演では「確かに。そうだな。」と思うところが多かったです。例えば「こどもは太陽の光と広いスペースがあれば意味もなく走り回る」というお話を聞いたときに、チャイルドケモハウスの広場で走り回っている子を思い出しました。また、「小児がんの治療は短くて6ヶ月、長ければ1年以上の入院が必要」というお話を聞いたときに、長期入院していた子達を思い出しました。他にも講演でいろんな“ズレ”を教えてくださいましたが、私はそのズレをどこまで理解して実習に取り組んでいただろうかと振り返る機会となりました。「早期発見と小児がんの治癒率は無関係」であっても、お母さんは「健康な子供に産んであげられなかった…。もっと早く気付いてあげれば…。」と思うと聞いて、私がもし母親という立場になったとしても同じことを思うなと感じました。現在小児がんは日本でもアメリカでも、15歳未満の人口1万人に1人発症する事から、育て方や家系は関係なく誰でもがなる可能性のある病気だと教えてくださいました。そのことを知っている人はどれくらいいるのだろうかと思いました。また、それを知っていても自分を責めてしまうお母さんをどのようにサポートしたらいいのか、今の私には考えてもいい案はでてきませんでした。病院実習中に、入院時よりも体調が良くなり笑顔も増えてきたお子さんや、そんな我が子の隣で微笑みながら頭を撫でてくれる保護者の方を何度も見ました。その時私は「元気になってよかった」と思っていました。しかし、「医療者から見たら、ベッドの上でニコツとしている姿が元気そうだと認知しているが、元気にしていた姿を知っている親からしたら違う」というお話を聞いて、確かにと思うと同時に、患者さんや患者さんに関わりのある人に対して、失礼にならない言葉づかいをしなくてはならないなと思いました。それは相手は何歳であっても関係ないことではないかとも思いました。

メディカルカフェに参加させて頂くと、医療従事者と患者さんの間にある“ズレ”をたびたび感じます。そのズレをできるだけ解消していくことが、患者さんに寄り添った医療を提供できることに繋がっていくのだと思います。今回は、メディカルカフェを通していろんな立ち位置の人のいろんな考えを知ることが出来る、という経験の重要性を再認識するカフェとなりま

メディカルカフェを終えて

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ

3 回生 神田 弥音

今回はチャイルドケモハウスの院長をされている楠木先生のご講演をきかせていただきました。講演では涙なしには聞けない貴重なお話を聞かせてくださりました。遊ぶのが大好きなお子さんが、家族や友達と会うことを制限され外出もできない中、抗がん剤治療と闘うのはとても耐え難い苦痛です。そのためこのような自宅で家族と共に治療ができるというチャイルドケモハウスは患者さん自身もそのご兄弟、ご家族にとっても夢のような場所です。以前施設にお邪魔させていただいたときあまりの綺麗さに驚きを隠せませんでした。各部屋には天窗があり自然光が差し込むようになっており、窓からは緑があふれていました。遊ぶスペースも広くあり、患者さんたちが本当に生き生きとしていて、治療と闘っているとは思えないくらい明るい笑顔を見せてくれました。

次ページへつづく

この施設はボランティアで成り立っているそうです。そうした善意の心で患者さんたちをサポートしていることはすばらしい事だなと感じました。私も微力ではありますがボランティアという形で携わっていただけらなと思います。

講演後にはメディカルカフェが開催されました。今日のカフェを通して印象的だったのは、カフェが参加者の方々にとって大切な場になっているということです。がん患者さんの中には自分の病気を家族以外には伝えないという方が多くいらっしゃいます。それは自分の弱さを見せたくない、気を遣ってもらいたくない、元気な姿になってから会いたい、等様々な理由があります。そのため以前より外出する機会が減り家に引きこもりがちになったそうです。そんな方たちにとって同じ病気と闘っている人たちとの対話はたまっていたものを吐き出せ、お互い心から共感しあえ治療への励みになっているそうです。またこのカフェでみんなに元気な姿を見せるべくリハビリに励んでいるという方もいらっしゃり、ますますこのカフェの意義の大きさを感じさせられました。

「病気になって初めて自分を見つめることができた」というお話もとても印象的でした。病気にかかってから食生活改善のため栄養のお勉強をされたり、自分の体にあった運動法を探すため教室に通ったりと健康への意識が大きく変わったそうです。対話を横で聞いているととても専門的な用語が飛び交い、恥ずかしながら私も話についていくのに必死になるほど高度な話をされていて圧倒されました。患者さんだからといって医師から言われた通り受け身になるのではなく、自分で自分の健康を管理することが大切だと感じさせられました。それと同時に将来薬剤師になったときにはそういったセルフメディケーションをサポートできるよう、薬だけでなく病気や食生活など幅広く知識を蓄えていきたいなと思います。

初めてのメディカルカフェを終えて

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ
2回生 藤原 由佳理

私はメディカルカフェの始まる前、自分でも驚くほど緊張していました。今までがんサバイバーの方と話す機会がほとんどなく、どう接したらいいか、どうしたら相手を傷つけることなく話せるのか、そんなことばかり考えていました。

午後になりメディカルカフェの参加者の方が続々と来られ私の緊張もピークを迎えました。しかし実際に始まってみると時間はあっという間にすぎ、2時間半が10分ほどの様に感じました。

まずは「がんになっても笑顔で育つ」をテーマにチャイルドケモハウスの楠木先生のお話を聞きました。この中で私が特に印象に残ったのは「健康ということを言葉は時に人を傷つける」ということです。私は普段何気なく使っているこの言葉が時に人を傷つけてしまうことに改めて気づかされました。人の善意はときに人を傷つけてしまうことを忘れてはいけなと感じました。

講演会を終え、グループでの話に入りました。私のグループでは医療者が忙しそうに患者側が思っていることをなかなか話せない、医療者側と患者側との間にちょっとした差があるという意見がよくでてきました。これからの医療は治すことはもちろんだけどプラスで患者さんからどんなことを求められているのかを改めて教えられたようでした。薬学部の勉強で学ぶことが多く大変だけどその勉強の前提にあるのは一人一人の患者さんを治して心身共に笑顔にすることということをお忘れずにこれからもっと頑張っていけたらいいなと思えるカフェになりました。

顧問：樋野興夫

教頭：沼田千賀子

副塾長：横山郁子

塾生：久野聡子、増田悠香、園部愛梨、恵美良太、渡邊理乃、
新田菜月、神田弥音、北夏実、徳田華歩、竹ノ内涼、
藤原